仏教を身近にする伝道誌

浄土真宗を弘める会

道標

どうひょう

d o h y o

特別号 巻頭インタビュー ―― カール・ベッカー教授に聞く

―臨死体験者は語る―

「お浄土」と「光の姿」

ワシントンからのダルマ法話メッセージ

「東は東　西は西」

習わしを科学する

「墓」は仏教か

聞法のひろば、お坊さんのつぶやき ―編集後記

2013 ―夏― 特別号

INTERVIEW

カール・ベッカー教授に聞く

―臨死体験者は語る―

「お浄土」と「光の姿」

「往生」は我々日本人には耳慣れた言葉である。
しかし果たしてどこまで現代の日本人は、
あの世や浄土の実在性を知っているであろうか？
宗教離れ・お寺離れが叫ばれる日本！
京都大学こころの未来研究センター
教授 カール・ベッカー氏に
「臨死体験と仏教」という
テーマでお話をいただきました。

●先生はアメリカ人でいらっしゃいますが、東洋の宗教についてお詳しい。そして現代の日本人も知らない『往生伝』の研究をされました。そのきっかけは？

真宗は世界の宗教から見て異端的です。キリスト教から見ると、阿弥陀仏が歴史的に実在した者ではなく、単なる神話ではないか！ 他の仏教から見ても、輪廻の実在を軽視して、誰もが生前の行いにかかわらず救われるという、倫理観の伴わない構造は仏教の哲学に合わない。宗教学者から見ると、先祖崇拝という土着信仰をそのまま導入しているようにも見える。それは私の見解ではなく、あくまで宗教学において世界の一般的な真宗の見方なのです。

私はハワイ大学で宗教と哲学を勉強しました。なぜ私がその異端的な真宗を研究したかというと、それはハワイには一番力を持つ宗教だったからです。ハワイに移民した日本人の多くは真宗門徒です。彼らに対して、キリスト教徒や宗

註1　極楽浄土への往生を願い、浄土に往生した人びとの事跡や奇瑞を記した説話集。中国、唐代に浄土教の流行に従って編纂されるようになる。日本にも影響を与え、985年頃、慶滋保胤（よししげのやすたね）の『日本往生極楽記』を皮切りに、多くの往生伝が作られるようになる。江戸時代には浄土宗・浄土真宗の僧により、往生伝の編纂が盛んに行われ、特に浄土真宗では江戸時代末期に《妙好人（みょうこうにん）伝》が著され、念仏者の理想像とされた。

教学者の批判を多く耳にしました。しかし実際彼らに接してみると、本当に勤勉・倹約・信頼という言葉に値する人たちばかりでした。このような人たちが馬鹿げたおかしなものを心の支えとしているはずがない。神話ばかり信じて、このように生きれるはずがない。一体その精神的な根拠・底力は何なのか？ということに私は非常に関心を持ちました。そこでハワイ別院などに足を運んで話をいろいろ聞きましたが、なかなか納得いく答えが得られず、私は本当の阿弥陀の姿を調べるべく、ハワイや日本で『往生伝』（註1）などの研究を始めたわけです。

●先生のご研究がどのように「臨死体験」とリンクしていったのですか？

私が『往生伝』などの研究を始めた頃は、丁度ベトナム戦争の時代でした。ベトナム戦争では、それまでされなかったような救急医療をやり始めました。それまでの戦争では戦闘中、人が死んだり倒れたりした時は、そのまま放っておきました。しかしベトナム戦争では、倒れたどんなアメリカ兵に対しても救急ヘリを飛ばして、体を取り戻そうとしたのです。足の無い兵士や脳を打たれた兵士、重傷の兵士でも連れて帰ろうとしました。しかし死んだはずの兵士の中で「みんなが戦っていて銃の弾が飛び交っている光景を上の所から見ていた」と発言する兵士がたくさんいたのです。又「自分の意識がしばらくヤシの木から戦場を見下ろしていたけれど、次第にスーッと暗いトンネルを経て、花畑に生まれ変わった感じがする。そこがとても居心地が良くて、ずっと居たかったけれど、軍病院などで手術を受けているうちに、いつの間にか意識がむごい身体に戻されてしまった」という話をした兵士が多数いました。

一方、私はシカゴ出身ですが、シカゴ大学付属病院に、スイス生まれのエリザベス・キューブラ＝ロスという女医がいました。彼女は末期医療の一環で末期患者の話相手になっていました。英語が下手なためか、黙ってじっと相手がしゃべるのを聴いていました。（黙って聴く！それはお坊さんでも鉄則ですね。笑）するとシカゴの病院の末期患者に〈あの世を見てきた〉〈お迎えがきた〉という話が数々出てきました。後に彼女はその体験を『死ぬ瞬間』という本のシリーズにしました。しかしそれが原因で当時の病院からクビになってしまったのです。四十年前のアメリカは臨死体験の話を許せませんでした。

その頃、私は日本で『往生伝』を勉強していました。『往生伝』には人の死に様や、死んだと思われていた人が戻ってきた話や、トンネルを経てお浄土へ行ってきたという話が、たくさん載っています。

七十年代のベトナム兵士の話、病院での末期患者の話、そして『往生伝』の話、それぞれから〈光のお迎えが来る〉だとか、〈暗いところを経て、明るい花園や蓮の池のような世界へ生まれる〉とかいう報告によって、時代や場所、宗教教育や言語・文化を超えて共通点があるという認識が生まれてきたのです。八十年代になると、近代化のおかげで、それらの情報が交差して繋がってきます。そこで私を含めて若手の学者が臨死体験国際研究会を作り上げて、その後オックスフォード大学、ウェールズ大学など、多くの欧米の公立大学で、死ぬ時を真面目に研究しようという空気に進化したのです。

唯一欧米人が困ったことは、体験自体は疑うことはできないが〈光や命に満ち溢れる、素晴らしい聖なる存在が現れる〉という現象を名づける言葉がなかったことです。聖なる人はそれぞれモーゼやイエス、聖ペトロなどという名で呼ばれますが、学者や医師からみると、この現象は共通した同一のものです。英語にはその現象を意味する言葉が無いので、やむを得ず新たにフィギュア オブ ライト（Figure of light）「光の姿」という造語を創り、現在、至る所の医学文献などにも定着しています。そして〈光や命に満ち溢れて来迎する存在〉は正に「無量光」と「無量寿」を意味する「阿弥陀」ではないか、と私が論文で紹介して、欧米でも賛同を得ております。

事前に「臨死体験」の現象を知っていたから、死ぬ間際に自分もそのようなイメージを見るようになった、と考える人もいます。しかし全く臨死体験や阿弥陀のことを知らない三才の女の子が、溺れ死にそうになった時に阿弥陀を見るのです。阿弥陀を見たことがないアフリカの人が絶壁から落ちる時に阿弥陀を見るのです。又はマルクス主義者でキリスト教が大嫌いな人でも「光の姿」を見るのです。決して幼児教育の影響で見るわけでもなければ、DNAによって伝え得るものでもないのです。「臨死体験は現実である」ということは科学的研究によって証明済みの事実なのです。

過去半年間のニューヨーク・タイムズ、ノンフィクション・ベストセラーをご存知ですか？ ハーバード大学の医師、エベン・アレキサンダーが書いた、自分の臨死体験を証す本です。この本は決してキリスト教を支持するものではありません。著者自身も外科医だから、経験するまでは臨死体験などは単なる幻覚、脳の悪戯と思っていたのです。本人が一時的に死んで脳の新皮質が停止している間のことなので、科学的な知識でもって説明できる現象でもありません。この本が半年続けて、全米のノンフィクション・ベストセラーでしたが、それは珍しいことで、全米の注目度の高さを物語っています。

●浄土教や親鸞の教えについて、先生のお考えは？

皆さんのご存知な『正信偈』に出てくる七高僧（註2）の一人、中国の曇鸞は、六十才ぐらいの時に一度死ぬ体験をします。「眩い光の前へ立たされた」と、我に返り言うのです。自分の見た「あの世」をもっと知りたいから、その六十歳の老人が、中国の北部から二千キロ程の距離を越えて道教（仙人）の聖地、南部の茅山（南京付近）まで巡礼します。しかし帰路の途中に、インドの菩提流支という仏教僧に出遭い、あれだけ苦労してやっとの思いで手に入れた道教のお経を焼き捨てます。（註3）菩提流支からもらったお経は『観無量寿経』（註4）でしたが、それはいかにその観経が彼の体験に合っていたかの証拠です。曇鸞は故郷に辿り着いた後、火がついたかのように阿弥陀像をたくさん彫ります。その彫った阿弥陀像を中心にお寺活動が始まります。中国人というのは、理由がなければ簡単には信じません。ではなぜそこから阿弥陀信仰が弘まったかというと、その教えが曇鸞自身の臨死体験に基づいていたからです。同じく七高僧の善導は瞑想中にお浄土に行ってくるという体験を繰り返します。教えというものは自分の精神的な体験に基づいて弘まっていくわけです。決して神話ではない、人から聞いた話ではない、如是実感です！

日本人は平安時代から江戸時代まで千年近く『往生伝』の文献とその考え方を大事にしてきたのです。しかし現代の日本人はそれを勉強しない！ 特に廃仏毀釈（註5）以降「あの世はない」、「お浄土」は今の生き方や心の安心感だけだ、と解釈する人も浄土真宗の中でさえ現れてしまいました。浄土真宗は、つまり「お浄土は真だという宗」なのに、お浄土は方便や神話だけであるという僧侶が居るなんて、信じられません。親鸞の時代ではお浄土は当たり前の知識でした。親鸞が抱えていた悩みは、どうしたら自分みたいな凡夫がお浄土に往けるかという死活問題でした。阿弥陀仏の慈悲と願力で救われているとなると、自分は頑張らなくてもいい、自然に

註2　親鸞が選定した浄土教を弘めた七人の高僧。インドの釈迦（しゃか）、龍樹（りゅうじゅ）、天親（てんじん）、中国の曇鸞、善導、日本の源信（げんしん）、源空（げんくう）（法然）。
註3　三蔵流支授浄教 梵焼仙経帰楽邦『正信偈』より。
註4　『浄土三部経』の一つ。『仏説無量寿経』（大経）『仏説阿弥陀経』（小経）と共に浄土真宗の所依の経典。
註5　明治政府の神道国教化政策に基づいて起こった仏教の排斥運動。明治元年神仏分離令発布とともに、本堂・仏像・仏具・経典等に対する破壊が各地で行われた。

生きればいい、その救われた感謝のおもいが親鸞の「南無阿弥陀仏」に現れていったのだと思います。

●お寺離れ、宗教離れが叫ばれる現代日本。これからのお寺に対しての提言をしていただきたい。

四十年前に初来日した頃は、一般家庭の畳の上で死んでいく日本人は八割でした。その結果、死というものを怖がっていなかった、という調査報告があります。それがバブル期の内に、医学に任せれば大丈夫という勘違いをするようになり、八割もの人が入院して死ぬようになり、死を知らないから怖がるようになった。患者自身の意識はとっくにお浄土へ往っているのに、延命治療を試みて、体を機械で維持している。今の日本人は、お気の毒に、自分の体だけを信じて、お浄土を忘れる傾向にある。

お寺に出来ること？ それは「お浄土や阿弥陀は決して神話でもなければ過去のものでもない」と伝え弘めること！ 欧米の医学雑誌までお浄土を証明しつつある！ まずこれを学んで理解しよう。そうすれば、老人にとっても死が怖くなくなり、家族にとっても肉体だけをしがみつくように守ろうとすることにはなりません。又お寺が檀家や門徒さんの中心となり、彼らのボランティア活動をする場所となり、彼らの勉強したい寺子屋となり、彼らが活躍したい人材と場を提供する。そのようになれば、自然と門徒さんの方からお寺に集まって来ると思います。お寺にはそれだけの場があり、人脈があります。

親鸞は比叡山を下り、宗教の苦行を辞め、一人の人間としてみんなと一緒に農業までして働いたのです。それを可能にしたのが、阿弥陀への信仰なのです。すでに阿弥陀に救われているから感謝の気持ちを忘れず、毎日に集中できる。それは自分が生きながらもお浄土と繋がり、みんなと繋がれる智慧であると、結論付けさせて頂きたいと思います。

聞き手　「道標」編集ディレクター　石田 克彦

PROFILE

カール・ベッカー

1951年米国シカゴ生まれ。1981年 ハワイ大学イースト・ウエスト・センター大学院哲学研究科博士課程修了（ハワイ大学Ph.D.）。大阪大学や筑波大学の教員を経て、1992年京都大学教養部助教授、1998年京都大学総合人間学部教授。2007年京都大学こころの未来研究センター教授。西洋医学の終末期治療等に対し、東洋思想の立場から「離脱体験」研究を行い、全米宗教心理学からアシュビー賞を、1986年に国際教育研究会（SIETAR）から異文化理解賞を、1992年にボンベイ国際大学から名誉博士号を授与。「日本的」な医療倫理と教育実践を目指し、生きがい感と自殺防止の関わり、ホスピスやターミナル・ケア等の研究に取り組む。
『死の体験―臨死現象の研究』『生と死のケアを考える』（法蔵館）、『寄り添いの死生学』（浄土宗総合研究所）、『愛する者の死とどう向き合うか－悲嘆の癒し－』（晃洋書房）、編著等著作多数。他NHK「こころの時代"理想の終焉"を見つめて」に出演（2012年）

『東は東　西は西』

「東は東　西は西　両者相まみえること無からん」とはジョセフ・キップリング（1865-1936）の言葉である。彼はインド生まれで英国で教育をうけた作家である。のち彼は再びインドにもどっている。だから「東」とは狭義に解釈すればインドをさし「西」とはイギリス文明にあたる。しかし広義に解釈すれば「東」はアジア全般の文明にもあてはまるし「西」はアメリカを含む西洋文明とみなしてもよい。あるいはまた仏教とキリスト教にも対応できるであろう。

前置きはこれくらいにしておく。話がいきなり飛ぶが沖縄が返還になる少し前、たしか1970年ごろであったと思う。米国上院議員から議会図書館日本課に、ある文面の翻訳依頼がきた。当時、私は同課に勤務していた。手にとってみると沖縄住民代表から上院あての抗議文と琉球列島米国高等弁務官から沖縄住民あての返書である。

いきさつはこうである。周知の如く第二次世界大戦中、沖縄は悲惨な修羅場と化した。そして戦後も米軍基地内には亡くなった多くの人たちの遺骨が埋もれていた。それらの遺骨収集のため基地内の一部を掘らせて欲しいという嘆願書を基地軍政部に差し出したところ高等弁務官からの返書に「…戦争がすんですでに30年近くなるのに何故あなた方は今更、昔の悲しみを掘り起こそうとするのですか。魂は天国にあり地下にあるのは醜い骨ばかりではありませんか。」という意味のことが書かれていて嘆願は却下された。

「東」の民族にとっては、その骨こそが尊いのである。死者の遺骨を供養もせず野ざらしに放棄することは東方の民族にとって偲びないのである。それだからこそ戦後60年余りにわたり毎年遺骨収集団が南方諸国のジャングルに分け入り戦場に倒れた兵士の遺骨収集を続けてこられたのである。

東の民族にとって死者の骨は単なる解剖学的人骨の切片ではなくその中に一種の霊性が宿っていると見なされている。だからこそ遺骨は洗い清められ壷に納め墓地なり霊屋に安置して供養を行なう。伝承習俗としてそのように受け継がれている。だのにそれを「醜い骨」と切り捨てられると地元の人たちの憤慨もさることながら、我々にとっても取り付く島もないくらい東と西のへだたりを感じてしまう。

大雑把にいえばヨーロッパ人の考えは二元論にもとづき何事も善悪に分けてしまう。キリスト教では死者は「霊」と「肉体」に分けられ、「霊」は善（浄）で「肉体」（骨を含めて）は悪（不浄）と見なされる。だが一方、東方では建前はどうであれ墓参とは遺骨への参拝を意味する。東方の民族は遺骨を「醜い」とは考えない。私にとって「骨」ということを一つとって見ても東と西の開きを感じてしまった一事例である。

本田（ほんだ） 正静（しょうじょう）師
1929年ハワイ生まれ
大阪で育つ　龍谷大学卒（仏教学）
1954年開教使として渡米。
1961年から91年までワシントンDC、アメリカ議会図書館アジア部日本課に勤務。
2000年から09年まで浄土真宗本願寺派ワシントンD.C.恵光寺に非駐在臨時布教使として勤務。

習わしを科学する

「墓」は仏教か

お盆になると、多くの日本人は墓参りをします。帰省して先祖の墓にお参りする。ごく自然な当たり前な行為と思っています。しかし、墓は仏教的な儀礼でしょうか。こう問われると考えてしまいます。

佐柳島の埋め墓

石塔は「仏」を表していた

実は、「墓とは何か」を定義することは難しいのですが、ここでは現在見るような「石塔」墓としておきましょう。たしかに仏教的な石塔は、平安時代末期からあります。親鸞聖人が生きられた鎌倉時代から多くなります。墓としての石塔の基本型は、五輪塔と宝篋印塔と言われています。ところが、これらの石塔は、本来、「仏」をあらわすもので供養塔でした。「造寺造塔」といって、寺や石塔を造って仏を供養し敬うものでした。

死者や先祖を祀る、墓としての石塔が一般化してくるのは江戸時代からです。しかし、それでもまだ一部の富裕層しか墓を持てませんでした。「〇〇家先祖代々」という「先祖」が墓に刻まれるようになるのも江戸時代後期からで、「〇〇家」は明治になってからです。それまでの墓には、法名が刻まれていました。ごく普通の人々が墓（石塔）を造るようになったのは、明治以降といってもいいでしょう。新しいのです。

埋葬墓地が先、石塔は後から

では、庶民には墓がなかったのかというと、そうではありません。遺骸や遺骨を埋めた埋葬墓地がありました。

三十年ほど前、全国各地の墓地を見て回っていたとき、佐柳島という瀬戸内海の小さな島に行きました。ここは遺骸を埋葬する「埋め墓」と、霊魂を祭祀する「詣り墓」という石塔を別に建てる両墓制習俗で有名でした。墓地に足を踏み入れたとき、そこは石、石、石……おびただしい程の石積みされた光景が一面に広がっていました。よく見ると、埋葬（土葬）間もないのか脱ぎ捨てられた草履や息杖・死花・塔婆・野位牌・木偶の地蔵が置かれています。石積みの向こうには、澄んだ瀬戸内の海が広がり、真夏の青い空がどこまでも連続していました。たった一人で、この光景の中に身をおいたとき、不思議な感動に襲われました。「あぁ、人間は最後こうなっていくんだな、忘れ去られるんだな」という感慨でしたでしょうか。

真宗門徒の墓・旧徳山村

ダム建設で水没した岐阜県の旧徳山村は、真宗門徒の村でした。そこの墓地を訪れたときも、同じでした。「石塔」は建っていませんでした。

縁ある人の中に住みたい

つまり、埋葬墓地に石塔が加わって、今日みるような「墓」が成立したのです。石塔は仏教的な供養塔でしたが、次第に死者や先祖を祀る「墓塔」になりました。仏教は死者や先祖の霊が墓にいるとする祖霊信仰と習合しました。だから墓や墓参りは、仏教的な儀礼であると同時に、日本人の祖霊信仰なのです。

真宗門徒にとって墓とは何なのか。ある人に教えられたことがあります。お婆ちゃんが「私は重い墓の下などいきたくない、縁ある人々の中にすみたい」と語っていたと。

蒲池 勢至師（がまいけ せいし）

1951年生まれ

真宗大谷派長善寺住職、同朋大学仏教文化研究所客員所員

主な著書

『真宗と民俗信仰』（吉川弘文館）、『真宗民俗の再発見』（法藏館）、『民衆宗教を探る 阿弥陀信仰』（慶友社）、『太子信仰』（編著・雄山閣）、『蓮如上人絵伝の研究』（共編著・東本願寺出版部）他

仏教を身近にする伝道誌 道標 2013年夏 | 特別号 | 2013年7月1日発行 発行所／浄土真宗を広める会 萬福寺内 大阪市西区南堀江1-14-23 tel.06-6531-1328 fax.06-6531-1327 e-mail ktdao8.10@gmail.com

『読者の皆さまからの投稿をお待ちしています。編集室まで』

聞法のひろば

お坊さんのつぶやき

いつの頃からでしょうか。テレビの討論番組などでの語り手の口調が攻撃的になり、辛口コメントや毒舌が「切れ味のよい」話法として人々の支持を受けるようになってきました。

意見の異なる人の話をとりあえずはその好き嫌いは置いておき、冷静に話を最後まで聞き、相手の立場を考慮に入れながら何とか妥協点を探る。そんなゆったりとした議論はすっかり姿を消し、人の話の腰を折り、最後まで聞こうとせず、割り込み切り捨てる。他人の話は聞かない、自分の意見だけを言い募り、どれほど反証を示されても自説を曲げない議論の仕方がスタンダード(標準)になりつつあるようです。

自分がこれまで掴んできたもの、大事にしてきたものに執着することで、それらとは全く違う世界を聞いていく、ということができなくなっているのです。

浄土真宗では「聞く」ということを大事にします。それは自分がこれまで作り上げてきたものが崩れていくような体験です。自分が築き上げてきた檻の壁に亀裂が入り、そこから自分の「手持ち」のものとは異なる世界、自分の思いを超えた世界に出遇っていくという聞き方です。仏法を聞いていくあり方は、他人の話を聞く時のあり方にも通じるものがあるのではないでしょうか。私たちはもう一度「聞く」ということを見つめ直さなければなりません。

大阪　僧侶　太道

編集後記

「これ見たらいい！外国の方が良いことを言ってはる。今の日本人でこういうこと言う人いはれへん。ほんとに悲しいわ！」と母はNHK「心の時代」を録画したDVDを貸してくれた。そこには死について、かつての日本人は潔かったこと、病院ではなく家で看取っていたこと、年忌法要、お仏壇は亡くなった人と共存できる素晴らしい癒しの場であるということ、そして今の日本人はそれらを失いつつあることも、カール・ベッカー氏は熱っぽく語っておられた。戦後生まれの私にとってそのご指摘は新鮮なものであり、心に突き刺さるものであった。

戦後の日本は過去のものを否定して新しいものとして西洋化、経済効率をひたすら追い求めてきた。しかし不況が長く続くせいか隣国の台頭のせいか「変だぞ日本！」母ばかりでなく、その声は年齢問わず至る所で聞こえてきているように思われる。やはり「宗教は根本である」という事を戦後の日本人はなおざりにしてきたのではないか？「過去の素晴らしい日本人の精神的遺産を忘れるな！」そのベッカー氏の熱いメッセージは、我々に又真宗の流れを汲む者に諫言とともに応援をいただいたように思われる。お忙しい中、快くインタビューを引き受けていただき心より感謝申し上げます。

平成二十五年六月　編集室　石田克彦

天王寺七坂

四天王寺さん周辺には、大阪市を南北に横たわる上町台地があります。その上町台地には(天王寺七坂)と言われている七つの坂道があります。

これらの坂道の周辺一帯は、江戸時代に大阪城下より移転させられたお寺がたくさん集まっており、著名人のお墓や碑や、大阪市唯一の滝(玉出の滝)が観光スポットになっています。天王寺七坂と言われている、夕陽丘は、地名通り大阪市内を見わたせます。坂道の、上り下りは、結構大変ですが比較的に緑が多く残っていて、西方に沈む夕陽に手を合わせてみるのも如向でしょうか。

北から順に、(真言坂)(源聖寺坂)(口縄坂)(愛染坂)(清水坂)(天神坂)(逢坂)。

清水坂

株式会社 廣瀬佛檀店
〒543-0062 大阪府大阪市天王寺区逢阪2丁目1-12 四天王寺西門交差点 西へ30m
タウンページ http://nttbj.itp.ne.jp/0667717007/(詳細地図あり)
0120-817065 ☎06-6771-7007